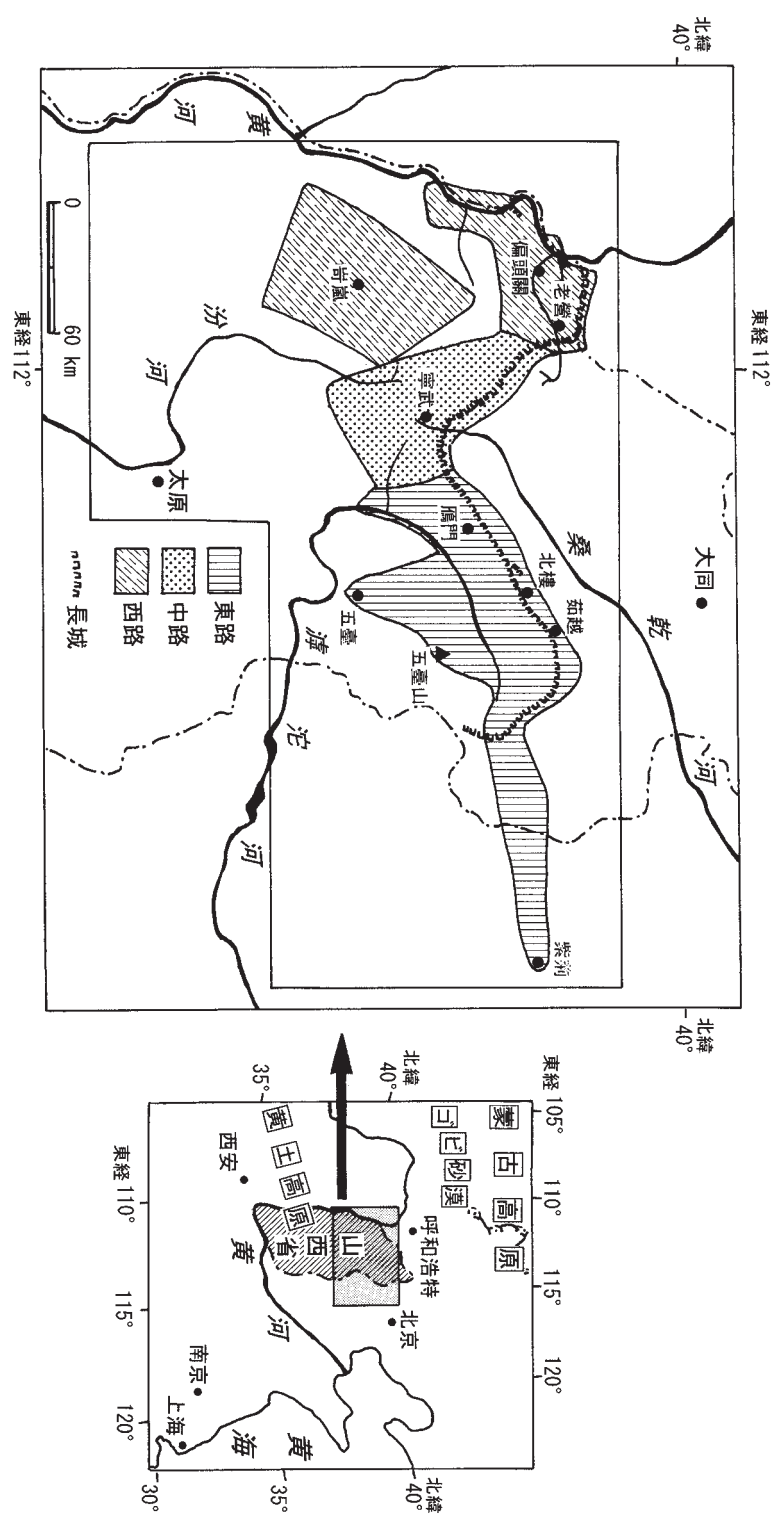


国立故宮博物院ならびに 京都大学所蔵の「山西辺垣図群」の描図パターンと比較と分類

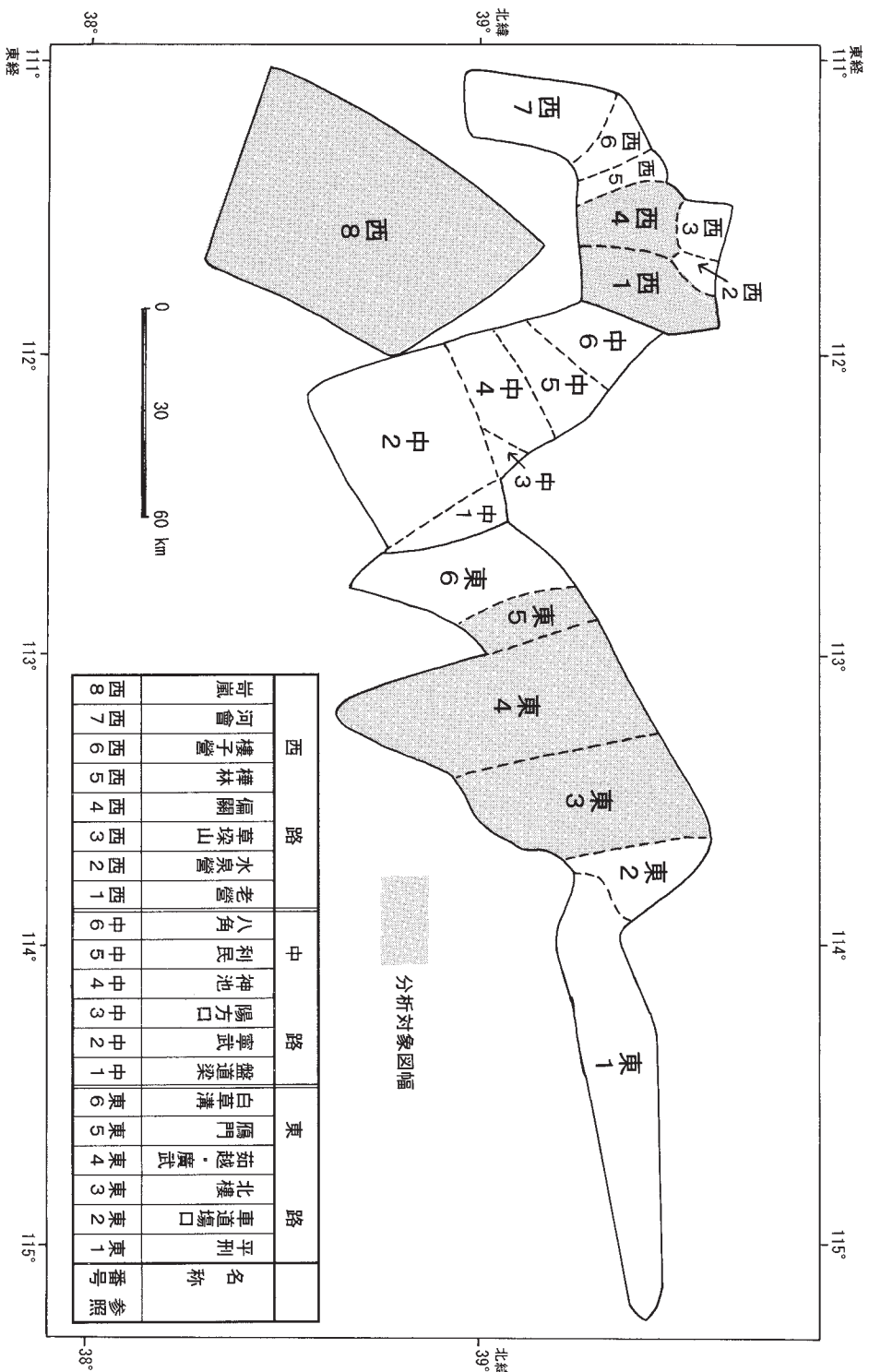
田 中 和 子
木 津 祐 子
宇 佐 美 文 理

はじめに

台湾の国立故宮博物院には『山西辺垣図』と『山西三関辺垣図』という、京都大学蔵『山西辺垣布陣図』にきわめてよく似た二種の古地図が所蔵されている。これらの古地図は「山西辺垣図群」と総称しうるものであることを、田中・木津（二〇一一）^①で報告した。国立故宮博物院所蔵の地図の一部は作成年代や進呈者等の記録を有するが、京都大学所蔵の地図を含めて、記録が不明な地図が少なくない。本稿では、「山西辺垣図群」の作成の年代考証や作成理由、背景となる政治・軍事情勢、作成や進呈のシステム等を解明するための手がかりとして、地図の描図パターンを比較の指標として用い、「山西辺垣図群」の分類を試みる。



図一 『山西辺垣布陣図』(京都大学蔵) および 『山西三関辺垣図』(国立故宫博物院蔵) の描く領域
注) 図中の山西省の省界は現代のもの。



田中・木津(二〇一一)^(注1)および田中・木津・宇佐美(二〇一〇)⁽²⁾で説明したように、「山西辺垣図群」は三組(二〇図幅)で構成され、それぞれの組は、内長城の東路(六図幅)、中路(六図幅)、西路(八図幅)に沿う地帯を描く(図一、図二)。国立故宫博物院所蔵の「山西辺垣図群」に含まれる地図は、合計一四八図幅、二十二組である。それらのうち、『山西辺垣図』(十八冊)には、東路・中路・西路をすべて含むまとまりが四つある。残りは、西路のみを含むものが二つ、中路と西路を含むもの、中路と東路(二組)を含むものがそれぞれ一つある。『山西三関辺垣図』(二〇冊)は、東路・中路・西路を一組ずつ有する。京都大学蔵『山西辺垣布陣図』(一二図幅)は、中路の五図幅と西路の二図幅を欠く。

国立故宫博物院ならびに京都大学の両機関が所蔵する「山西辺垣図群」全体では、東路を描く地図、中路を描く地図が各々八組、西路を描く地図が九組ある。これらの地図が描く内容を詳細に観察すると、同じ東路を描く地図群同士ですら、画法や記載された文字だけでなく、城、縣、墩、山河などの位置や形状の描き方等に、程度の違いはさまざまであるが、明確な差異がある。こうした地図の描写内容、すなわち、描図パターンの類似性や相違をもとに、「山西辺垣図群」の分類を試みることに、作成年代や作成状況を突き止める手がかりにできないかと考えた。こうした描図パターンの比較と分類は、田中・木津(二〇一一)^(注1)で行った五臺山や利民堡などの位置や形態についての予備的な検討を発展させたものであると同時に、破損が著しく現物閲覧が不可能である、鮮明とはいえない写真画像、判読の困難な文字といった諸制約のなかで、地図に描かれた対象そのものに焦点を当てたアプローチから何を明らかにできるかを追求する試みでもある。本稿で分析対象とする図幅に記載された文字の判読作業を木津と宇佐美が行い、その情報にもとづいて、田中が描図パターンの比較と分類を行った。

描図の比較分析に先立って、まず第一章では、田中・木津(二〇一一)^(注1)に掲げた、『山西辺垣図』・『山西三関辺垣図』および京都大学蔵『山西辺垣布陣図』の内部構成一覽表の改訂版を提示する。続いて第二章では、「山西辺垣図群」におけ

る五臺山と五臺縣、馬站堡と永興堡、および岢嵐州と嵐縣の描かれ方を比較する。第三章では、第二章での検討に基づいて、描図タイプによる「山西辺垣図群」の分類を試みる。最後に、今回の調査で得られた成果を踏まえて、今後の研究の見通しと課題を示す。

第一章 『山西辺垣図』・『山西三関辺垣図』および『山西辺垣布陣図』の内部構成

田中・木津（二〇一一）^{（注1）}に掲げた、『山西辺垣図』・『山西三関辺垣図』および京都大学蔵『山西辺垣布陣図』の内部構成一覧を二つの点で改訂した。一つは、二〇一一年秋の国立故宫博物院圖書文献処での調査において、副研究員の盧雪燕氏より、『山西辺垣図』（十八冊）の書誌整理の経緯について説明を受け、「卷一」「卷二」→「卷十七」の「卷」に代えて、「冊」を用いるほうが適切である旨、ご教示を得たことである。第二点は、『山西辺垣図』（十八冊）に含まれる一二八枚の図幅の配列を詳細に検討し、第十七冊の八枚の図幅（西路）に配列順序の乱れがあることを突き止めたことである。表一は、これら二点を踏まえて改訂したものである。

田中・木津（二〇一一）^{（注1）}では、第一冊に含まれる二組の東路の配列順序が、地図上の東から西へという配列の原則に逆行していることを指摘した。第十七冊（西路のみ）も、配列筆頭の「老營」（参照番号「西1」）以外の図幅の配列順が逆行している。「老營」の次に、通常末尾に配列される「岢嵐」（参照番号「西8」）が並び、以下、順に遡る形で「水泉營」（参照番号「西2」）が末尾にある。

こうした各冊の配列順序の乱れが複数の冊で見られることは、個々の図幅の修復あるいは綴じ合わせ形態への集成過程の

表一 国立故宫博物院蔵『山西辺垣図』・『山西三関辺垣図』および京都大学蔵『山西辺垣布陣図』の内部構成一覽表

進呈年代 不詳

不詳

順治二年（一六四五）

順治二年（一六四五）

順治四年（一六四七）

（進呈者（不詳））

（不詳）

（黄徽胤）

（黄徽胤）

（呂維樸）

六

配列 『山西邊垣圖』	順序 第十六冊	参照 番号
一 老營	西 1	
二 水泉營	西 2	
三 草垛山	西 3	
四 偏關	西 4	
五 樺林	西 5	
六 樓子營	西 6	
七 河會	西 7	
八 岢嵐	西 8	

配列 『山西邊垣圖』	順序 第十七冊	参照 番号
一 老營	西 1	
二 岢嵐	西 8	
三 河會	西 7	
四 樓子營	西 6	
五 樺林	西 5	
六 偏關	西 4	
七 草垛山	西 3	
八 水泉營	西 2	

配列 『山西邊垣圖』	順序 第十三冊	参照 番号	配列 『山西邊垣圖』	順序 第十四冊	参照 番号
一 平刑	東 1		一 盤道梁	中 1	
二 車道場口	東 2		二 寧武	中 2	
三 北樓	東 3		三 陽方口	中 3	
四 茹越・廣武	東 4		四 神池	中 4	
五 鴈門	東 5		五 利民	中 5	
六 白草溝	東 6		六 八角	中 6	

配列 『山西邊垣圖』	順序 第十冊	参照 番号	配列 『山西邊垣圖』	順序 第十一冊	参照 番号
一 平刑	東 1		一 盤道梁	中 1	
二 車道場口	東 2		二 寧武	中 2	
三 北樓	東 3		三 陽方口	中 3	
四 茹越・廣武	東 4		四 神池	中 4	
五 鴈門	東 5		五 利民	中 5	
六 白草溝	東 6		六 八角	中 6	

配列 『山西邊垣圖』	順序 第七冊	参照 番号	配列 『山西邊垣圖』	順序 第八冊	参照 番号
一 平刑	東 1		一 盤道梁	中 1	
二 車道場口	東 2		二 寧武	中 2	
三 北樓	東 3		三 陽方口	中 3	
四 茹越・廣武	東 4		四 神池	中 4	
五 鴈門	東 5		五 利民	中 5	
六 白草溝	東 6		六 八角	中 6	

順治六年（一六四九）

（劉滿）

*『國立北平圖書館特
藏清內閣大庫輿圖目錄』
には三冊とあるが、国立
故宮博物院の分類では、
第二冊と第三冊のみ。

配列 『山西邊垣圖』	順序 第二冊	参照 番号
一	盤道梁	中1
二	寧武	中2
三	陽方口	中3
四	神池	中4
五	利民	中5
六	八角	中6
配列 『山西邊垣圖』	順序 第三冊	参照 番号
一	老營	西1
二	水泉營	西2
三	草垛山	西3
四	偏關	西4
五	樺林	西5
六	樓子營	西6
七	河會	西7
八	崑崙	西8

順治六年（一六四九）

（蔡應桂）

配列 『山西邊垣圖』	順序 第一冊	参照 番号
一	盤道梁	中1
二	寧武	中2
三	陽方口	中3
四	神池	中4
五	利民	中5
六	八角	中6
七	白草溝	東6
八	雁門	東5
九	茹越・廣武	東4
十	北樓	東3
十一	車道場口	東2
十二	平刑	東1
十三	白草溝	東6
十四	雁門	東5
十五	茹越・廣武	東4
十六	北樓	東3
十七	車道場口	東2
十八	平刑	東1

*『國立北平圖書館特
藏清內閣大庫輿圖目錄』
には二冊とあるが、第一
冊の分量は三冊分に相当
する。

順治十五年（一六五八）

（白尚登）

配列 『山西邊垣圖』	順序 第四冊	参照 番号
一	平刑	東1
二	車道場口	東2
三	北樓	東3
四	茹越・廣武	東4
五	雁門	東5
六	白草溝	東6
配列 『山西邊垣圖』	順序 第五冊	参照 番号
一	盤道梁	中1
二	寧武	中2
三	陽方口	中3
四	神池	中4
五	利民	中5
六	八角	中6
配列 『山西邊垣圖』	順序 第六冊	参照 番号
一	老營	西1
二	水泉營	西2
三	草垛山	西3
四	偏關	西4
五	樺林	西5
六	樓子營	西6
七	河會	西7
八	崑崙	西8

不詳

（不詳）

配列 『山西三關邊垣圖』	順序 垣圖	参照 番号
一	雁門	東5
二	利民	中5
三	八角	中6
四	草垛山	西3
五	偏關	西4
六	樺林	西5
七	樓子營	西6
八	神池	中4
九	陽方口	中3
十	寧武	中2
十一	盤道梁	中1
十二	河會	西7
十三	平刑	東1
十四	白草溝	東6
十五	茹越・廣武	東4
十六	北樓	東3
十七	老營	西1
十八	車道場口	東2
十九	崑崙	西8
二十	水泉營	西2

不詳

（不詳）

配列 『山西邊垣布陣圖』 （京都大学）	順序	参照 番号
一	寧武	中2
二	雁門	東5
三	平刑	東1
四	茹越・廣武	東4
五	北樓	東3
六	車道場口	東2
七	草垛山	西3
八	白草溝	東6
九	崑崙	西8
十	水泉營	西2
十一	老營	西1
十二	河會	西8
十三	偏關	西4
十四	盤道梁	中1
十五	陽方口	中3
十六	神池	中4
十七	利民	中5
十八	八角	中6
十九	樺林	西5
二十	樓子營	西6

* 欠落

（注）『山西邊垣圖』の統一番号は、国立故宮博物院による。進呈年代および進呈者は、『國立北平圖書館特藏清內閣大庫輿圖目錄』、国立北平圖書館、一九三四年、八〇一頁による。

追求が重要な調査課題であることを改めて示唆している。

第二章 五臺山と五臺縣、馬站堡と永興堡、および岢嵐州と嵐縣の描かれ方の比較

第一節 分析の対象とする描図の要素と図幅

田中・木津（二〇一一）^{（注1）}では、「山西辺垣図群」の中での五臺山と利民堡と嵐縣の位置や向き、形を比較した。この予備的な分析を展開させ、本稿では、以下の三点を検討する。すなわち、（1）五臺山と五臺縣はどの図幅に描かれるか（2）馬站堡と永興堡はどの図幅に描かれるか、（3）岢嵐州と嵐縣はどのような位置関係にあるか、である。このため、東路の五臺山と五臺縣を描く領域すなわち「北樓」「茹越・廣武」「鴈門」の三図幅、西路の岢嵐州と嵐縣を描く領域である「岢嵐」図幅を分析対象として取り上げる。同じく西路の老營城周辺を描く「老營」「偏關」の二図幅も分析対象としたのは、同じ「老營」あるいは「偏關」であつても、図幅によって、描かれる陣や墩に粗密の違いが目立つためである。京都大学蔵『山西辺垣布陣図』は中路の図幅の多くを欠くこともあり、本稿では、東路と西路に焦点をあてて、「山西辺垣図群」を比較することにした。

第二節 分析に用いる描図スケッチの作成手順

田中・木津（二〇一一）^{（注1）}でも述べたように、国立故宫博物院所蔵の『山西辺垣図』（第一冊から第十七冊）と『山西三関辺垣図』（二十冊）に含まれる一四八枚の図幅を、ネガフィルム（カラー）から印刷したもの、および大判写真（カラー）

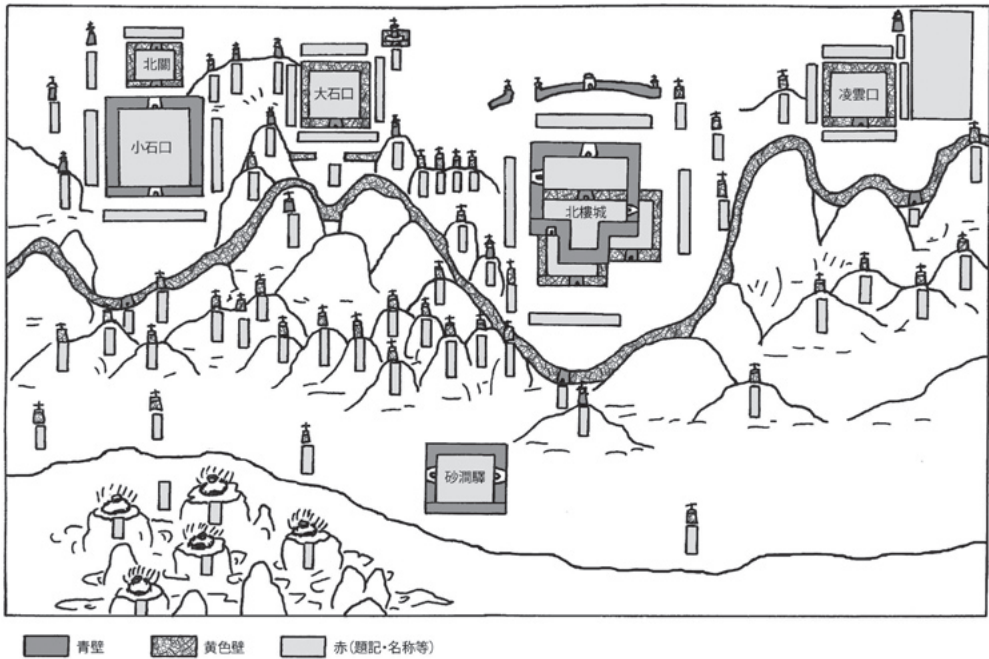
からコピーしたもの（すべてモノクロ）は、画像が鮮明でないことに加え、モノクロゆえに本来の色調や濃淡の違いがわかりにくい。文字も剥落が多く、判読困難である。これらの画像を詳細に観察し、描かれた城、縣、墩、山河などの位置や形状、施設名称や題記の有無や配置を線描きでスケッチした。城門や墩の屋根などの細部は簡略化しているが、陣の壁の色等の違いは表示した。先述したように、原資料の破損や剥落が著しいこともあつて、識別不能な部分もあつたが、こうしたスケッチは、それぞれの図幅に「何が所在し、どのように描かれているか」を把握するための資料として、有効に活用できるものである。同様の手法で、京都大学所蔵の『山西辺垣布陣図』については、現物とカラー写真をもとに各図幅の描図スケッチを作成した。

第三節 描図パターンの比較

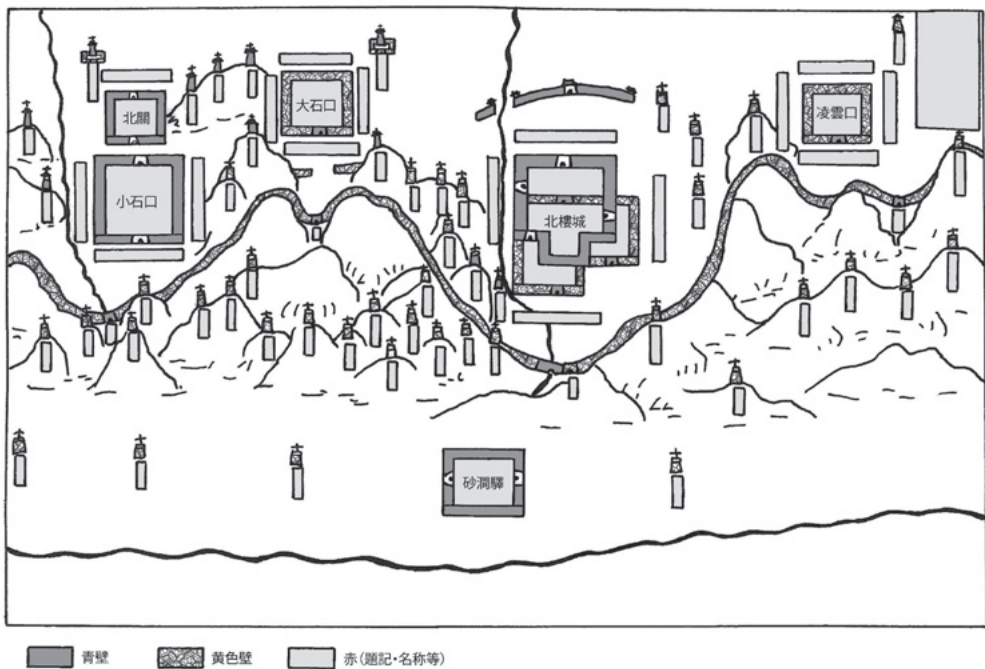
(1) 五臺山と五臺縣はどの図幅に描かれるか

表一に示すように、東路を描く図幅を含むのは、『山西辺垣図』第十三冊、第十冊、第七冊、第一冊（東路を二組合む）、第四冊、『山西三関辺垣図』、および京都大学蔵『山西辺垣布陣図』である。これらにおける「北樓」「茹越・廣武」「鴈門」の三図幅を検討したところ、五臺山と五臺縣の描かれる図幅およびその図幅内で占める位置に関して、四つの類型があることが判明した。これら四類型を示す図幅の描図スケッチを以下に掲げる。なお、満文が併記されたもの（『山西辺垣図』第十三冊、第十冊）は、漢文のみ記載されたものと比べて、文字の表記箇所が二倍になり、絵柄の部分が限られる。そのため、描図の全容が把握しづらいので、本稿では例示しないことにした。

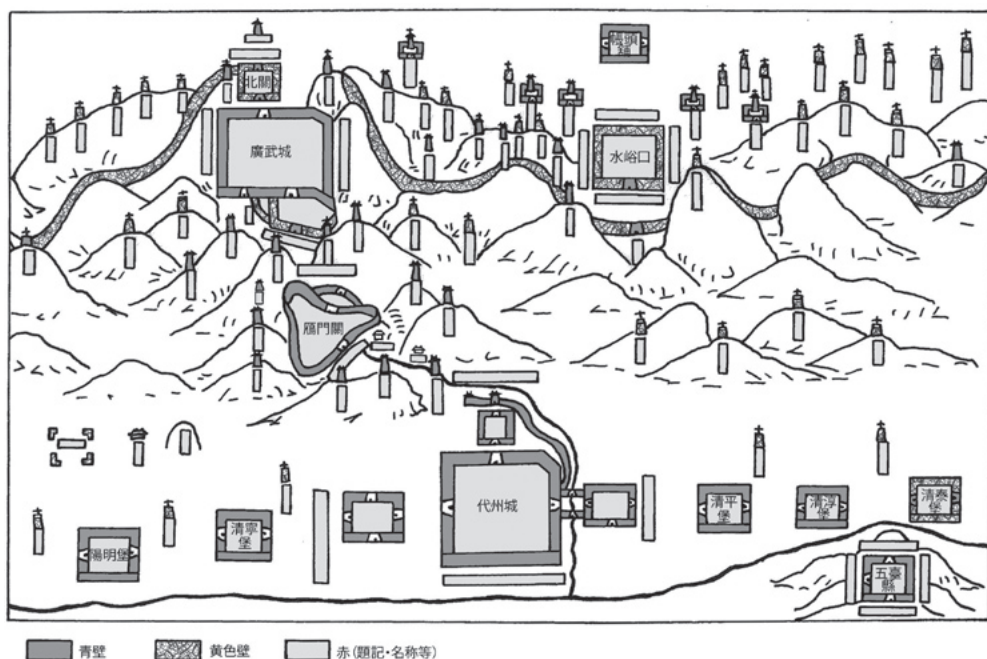
一〇頁の上段に、『山西辺垣図』第七冊の「北樓」図幅に描かれる五臺山（三）、次一一頁の上段に同第七冊の「鴈門」図幅に描かれる五臺縣（四）を掲げる。東の「北樓」と西の「鴈門」の間には「茹越・廣武」図幅があるが、「茹越・廣武」



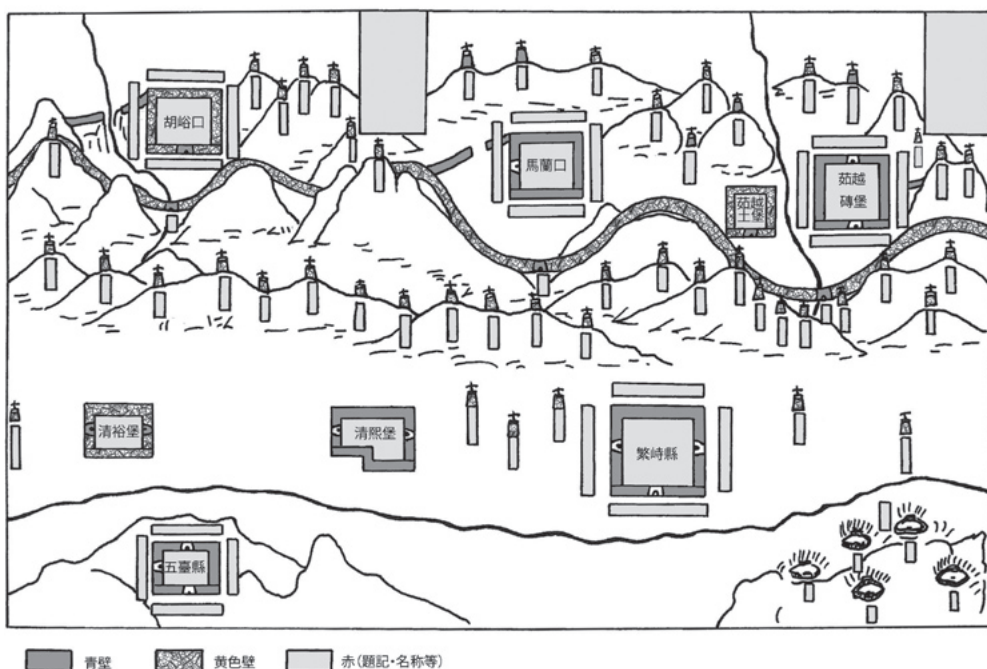
図三 「北樓」の描図スケッチ『山西辺垣図』第七冊（順治4年(1647)（進呈者 呂維樞））



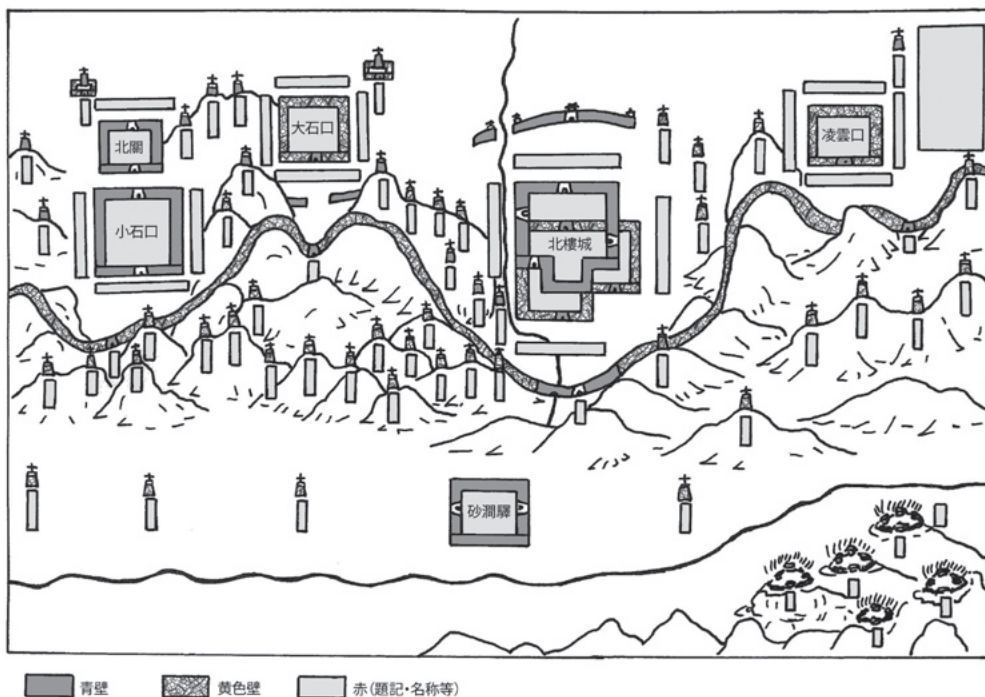
図五 「北樓」の描図スケッチ『山西辺垣図』第一冊（順治6年(1649)（進呈者 蔡應桂））
（同図内の配列順序は十六）



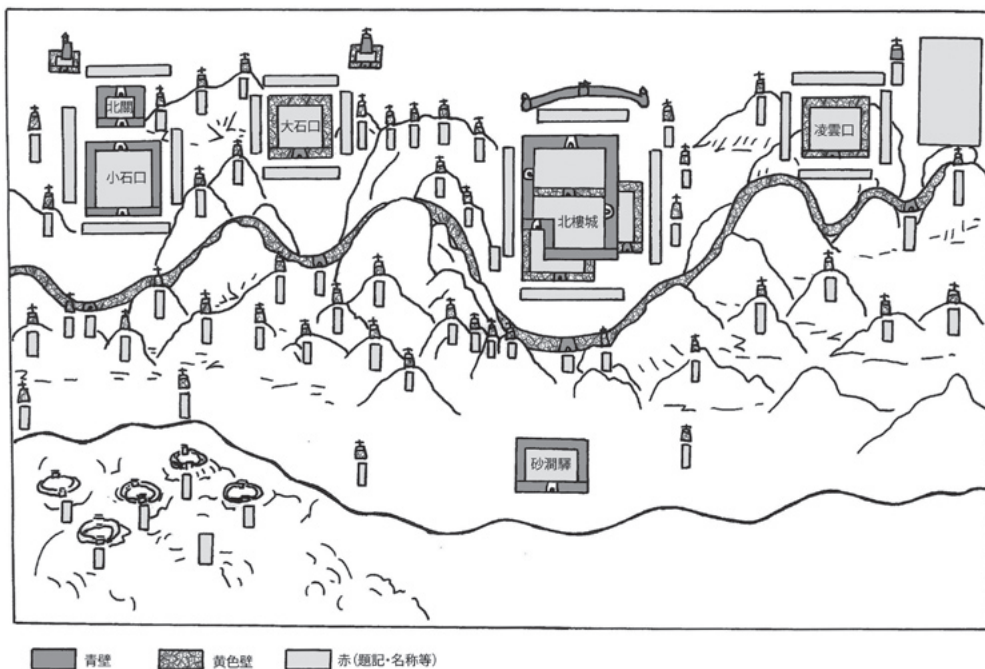
図四 「雁門」の描図スケッチ『山西邊垣図』第七冊（順治4年(1647)（進呈者 呂維禔））



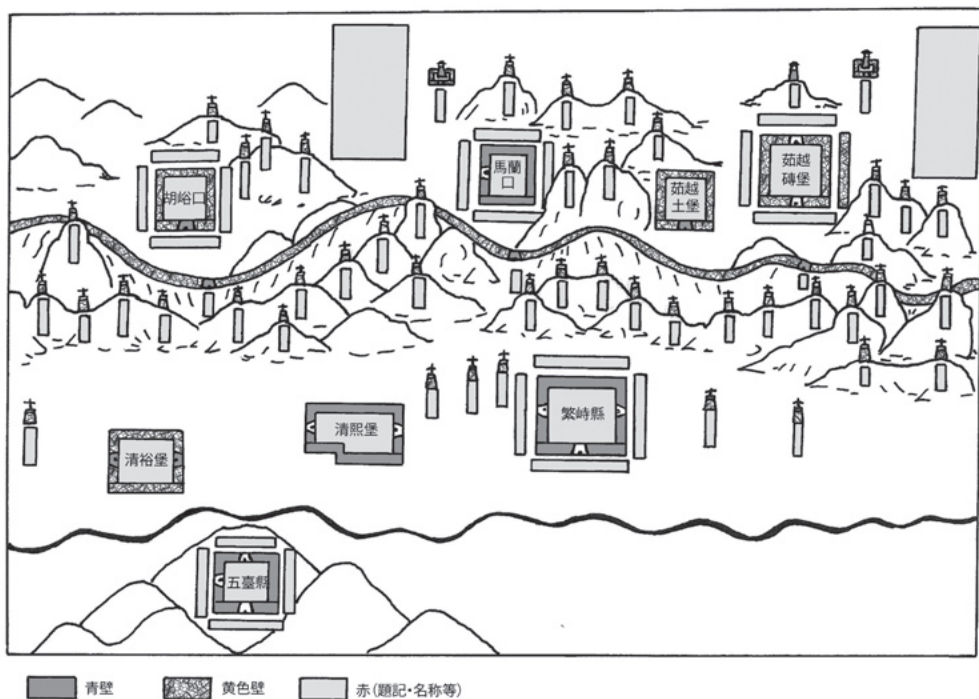
図六 「茹越・廣武」の描図スケッチ『山西邊垣図』第一冊（順治6年(1649)（進呈者 蔡應桂））（同図内の配列順序は十五）



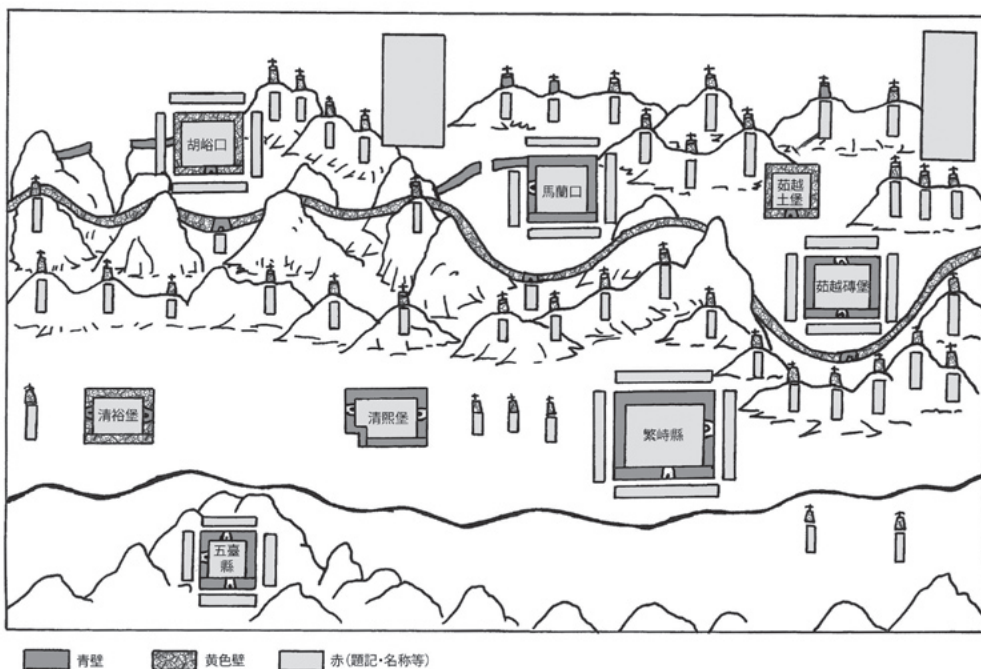
図七 「北樓」の描図スケッチ『山西辺垣図』第四冊（順治15年(1658)（進呈者 白尚登））



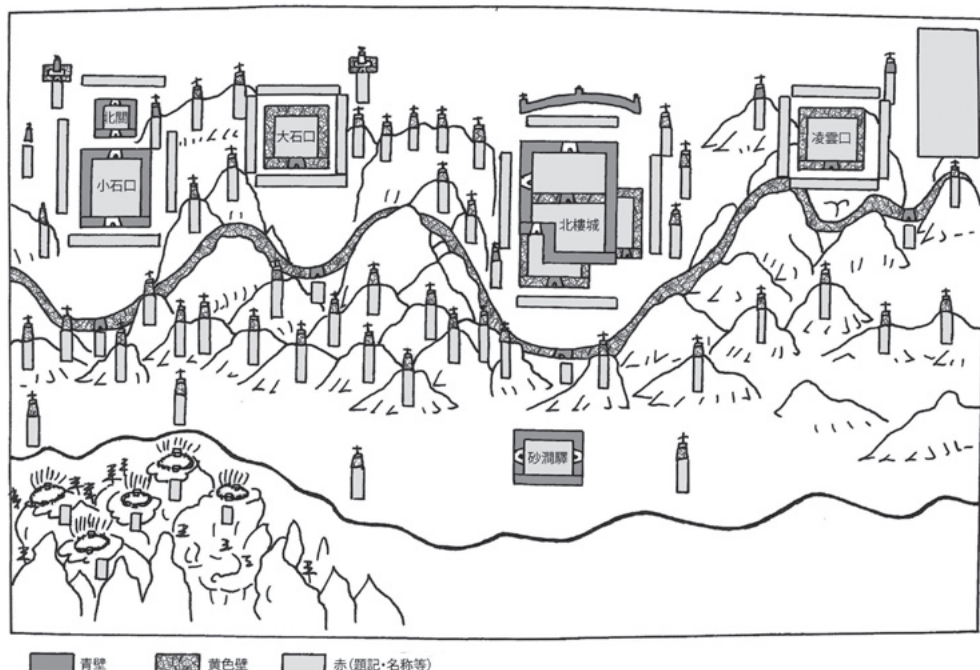
図九 「北樓」の描図スケッチ『山西三関辺垣図』（進呈年代 不詳、（進呈者 不詳））



図八 「茹越・廣武」の描図スケッチー『山西辺垣図』第四冊（順治15年(1658)（進呈者 白尚登））

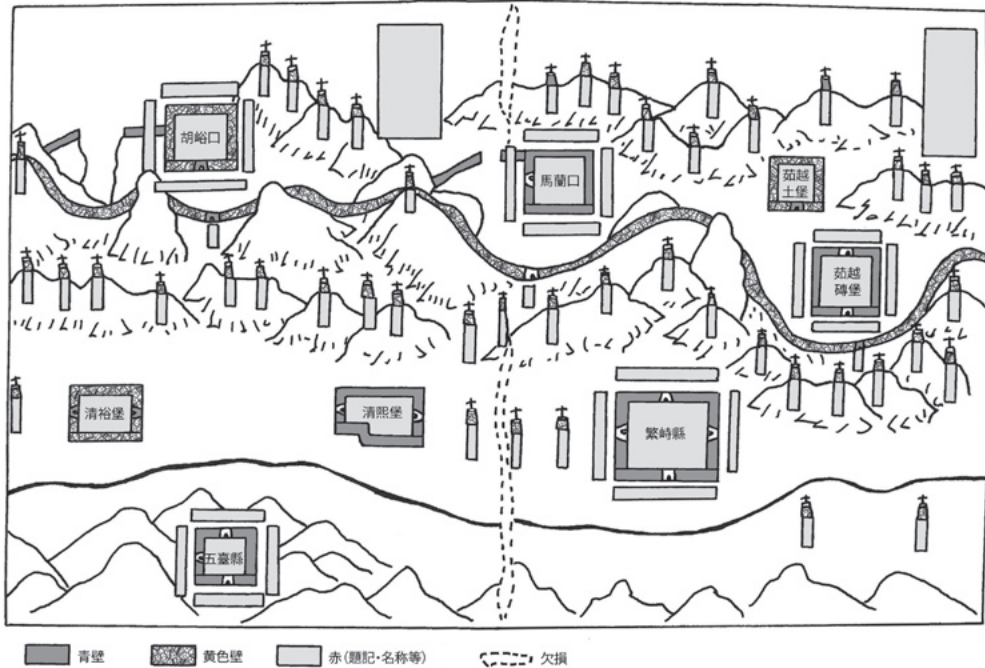


図十 「茹越・廣武」の描図スケッチー『山西三関辺垣図』（進呈年代 不詳、（進呈者 不詳））



図十一 「北樓」の描図スケッチ『山西辺垣布陣図』（京都大学蔵）（進呈年代 不詳、（進呈者 不詳）

には五臺山も五臺縣も描かれていない。こうした五臺山と五臺縣の配置は、「山西辺垣図群」に含まれる東路図のなかでは、最も離れて描かれたものである。これに対して、最も接近して五臺山と五臺縣が配置されているのが、両者がともに「茹越・廣武」に描かれる（図六（『山西辺垣図』第一冊）（二一頁下段）である。「茹越・廣武」の東に隣接する領域を描く「北樓」（図五（『山西辺垣図』第一冊）（二〇頁下段）には五臺山も五臺縣もない。これら二つの配置の中間にあるのが、図七の五臺山（『山西辺垣図』第四冊の「北樓」（二二頁上段）と図八の五臺縣（『山西辺垣図』第四冊の「茹越・廣武」（二三頁上段）の配置、および、図九の五臺山（『山西三関辺垣図』「北樓」（一二頁下段）と図十の五臺縣（『山西三関辺垣図』「茹越・廣武」（二三頁下段）の配置である。五臺縣はいずれも「茹越・廣武」図幅の左下に描かれているが、五臺山は図七では右下、図九では左下に描かれる。京都大学蔵の『山西辺垣布陣図』での五臺山と五臺縣の配置（図十一、図十二）（一四頁上段と一五頁上段）は、図九と図十（『山西三関辺垣図』）での配置と同じである。図十一と図十二、図九と図十、これ



図十二 「茹越・廣武」の描図スケッチー『山西辺垣布陣図』(京都大学蔵)(進呈年代 不詳、
(進呈者 不詳))

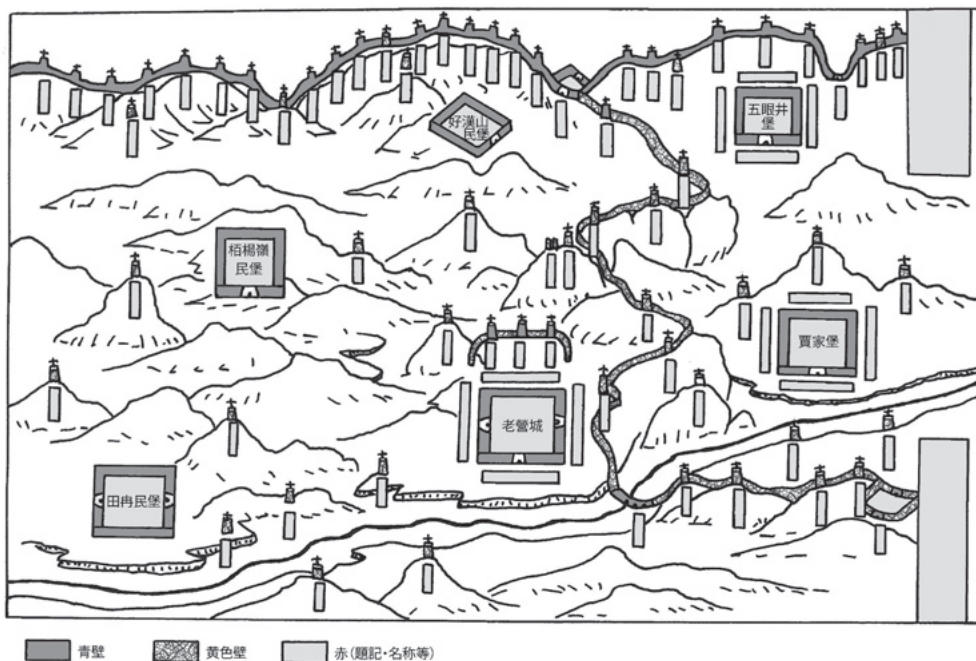
ら二組は、他の陣や墩、長城の形状もよく似ているが、五臺山の描写など異なる部分もある。

(2) 馬站堡と永興堡はどの図幅に描かれるか

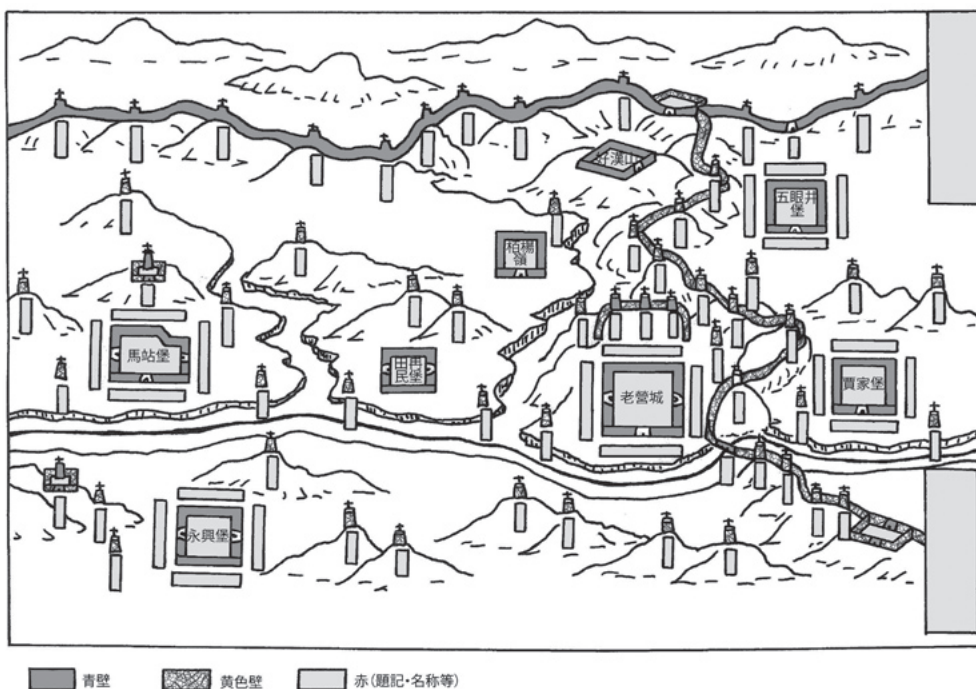
西路を描く地図を含むのは、『山西辺垣図』第十六冊、第十七冊、第十五冊、第十二冊、第九冊、第三冊、第六冊、『山西三関辺垣図』、および京都大学蔵『山西辺垣布陣図』である(表一)。これらにおける「老營」「偏關」を検討したところ、馬站堡と永興堡が「老營」の図幅に描かれるものと、「偏關」に描かれるものの二類型が特定できた。これら二類型を示す図幅の描図スケッチを以下に掲げる。

一六頁の上段に、「老營」図幅(『山西辺垣図』第十六冊)

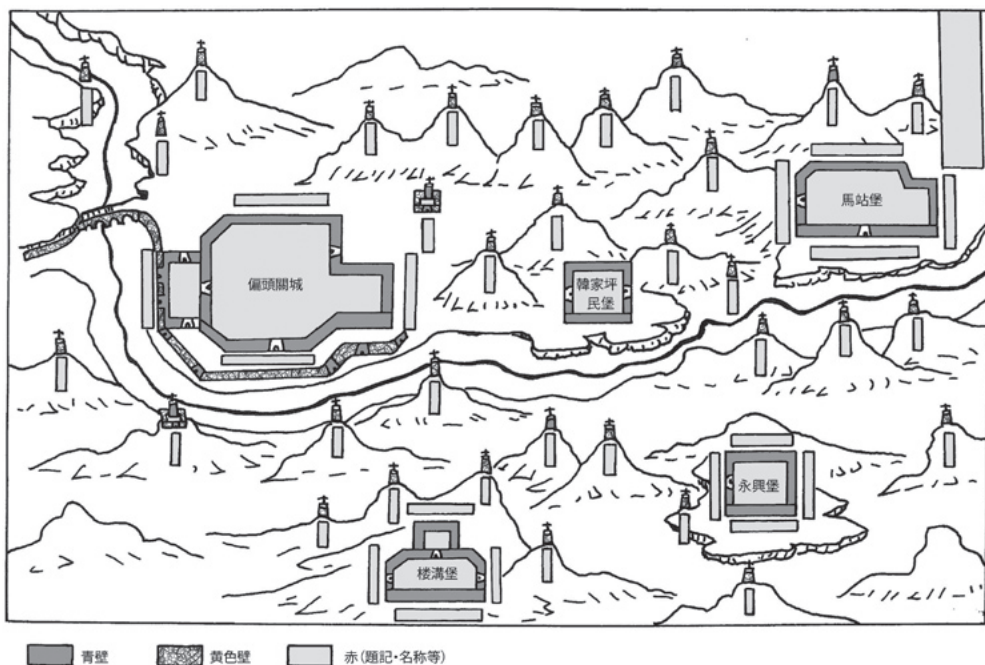
(図十三)を、次一七頁の上段に「偏關」図幅(『山西辺垣図』第十六冊)を掲げる(図十四)。馬站堡と永興堡はいずれも、「偏關」図幅に描かれている。これに対し、図十五の「老營」(『山西辺垣図』第六冊)(一六頁下段)には馬站堡と永興堡が描かれているが、図十六の「偏關」図幅(『山西辺垣図』第六冊)(二七頁下段)には描かれていない。これと同様の配置が、『山



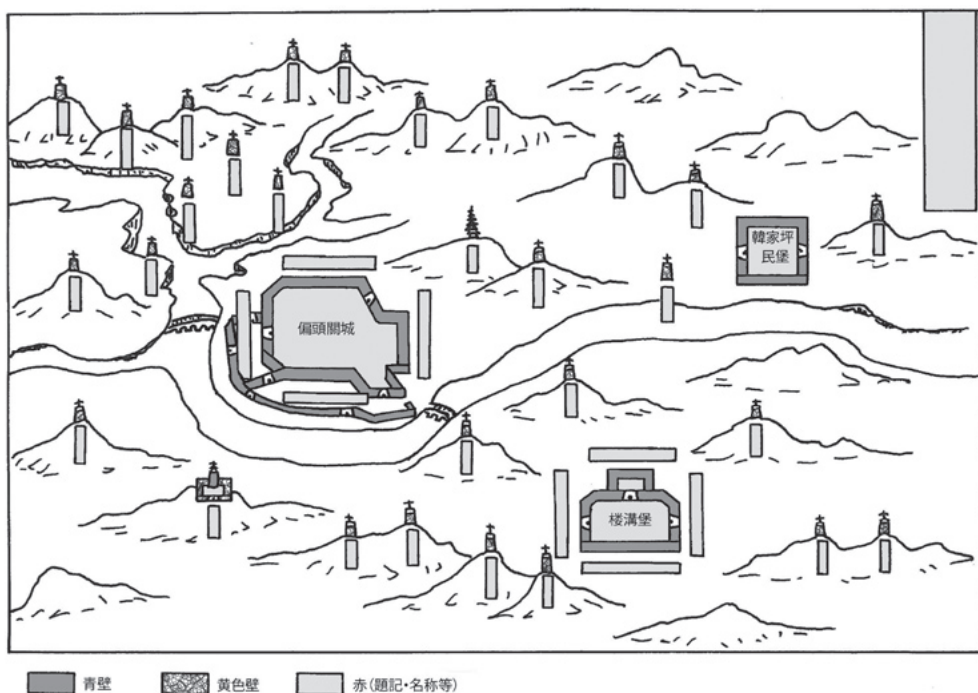
図十三 「老營」の描図スケッチー『山西辺垣図』第十六冊(進呈年代 不詳、(進呈者 不詳))



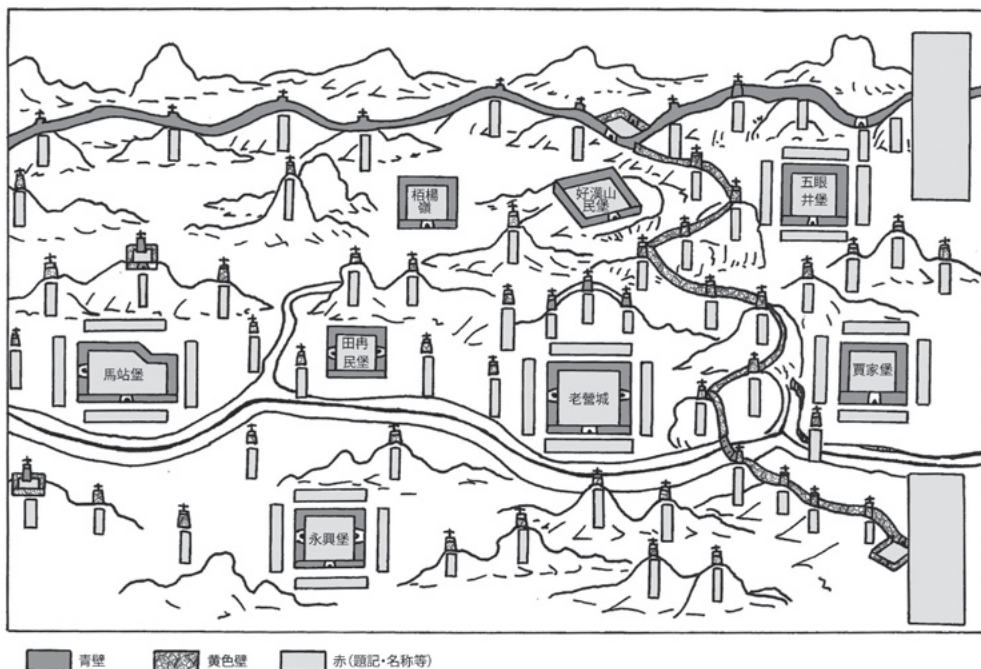
図十五 「老營」の描図スケッチー『山西辺垣図』第六冊(順治15年(1658)(進呈者 白尚登))



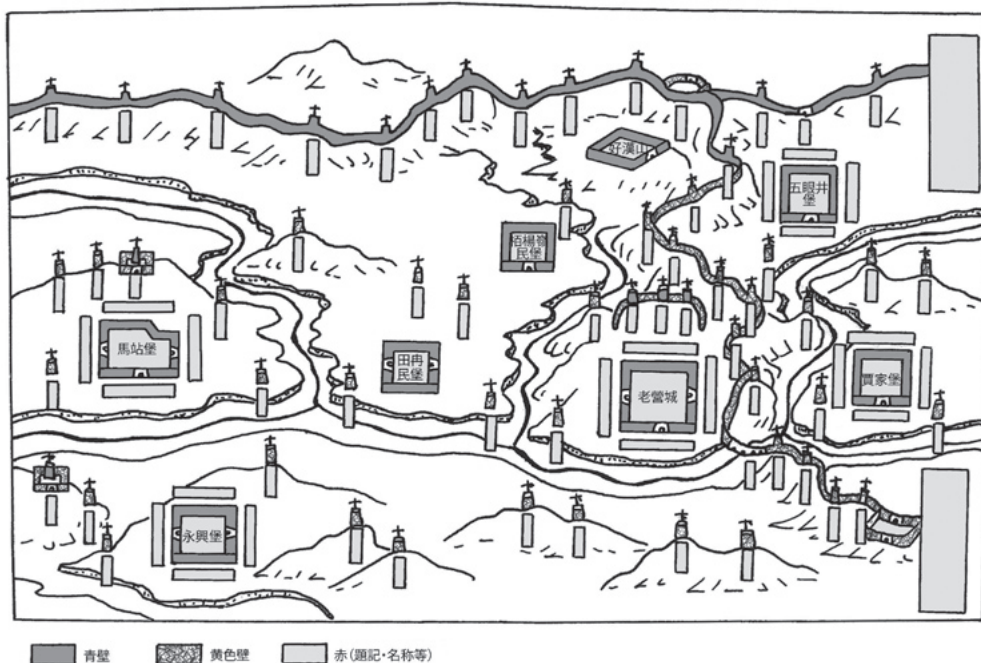
図十四 「偏關」の描図スケッチ『山西辺垣図』第十六冊（進呈年代 不詳、（進呈者 不詳））



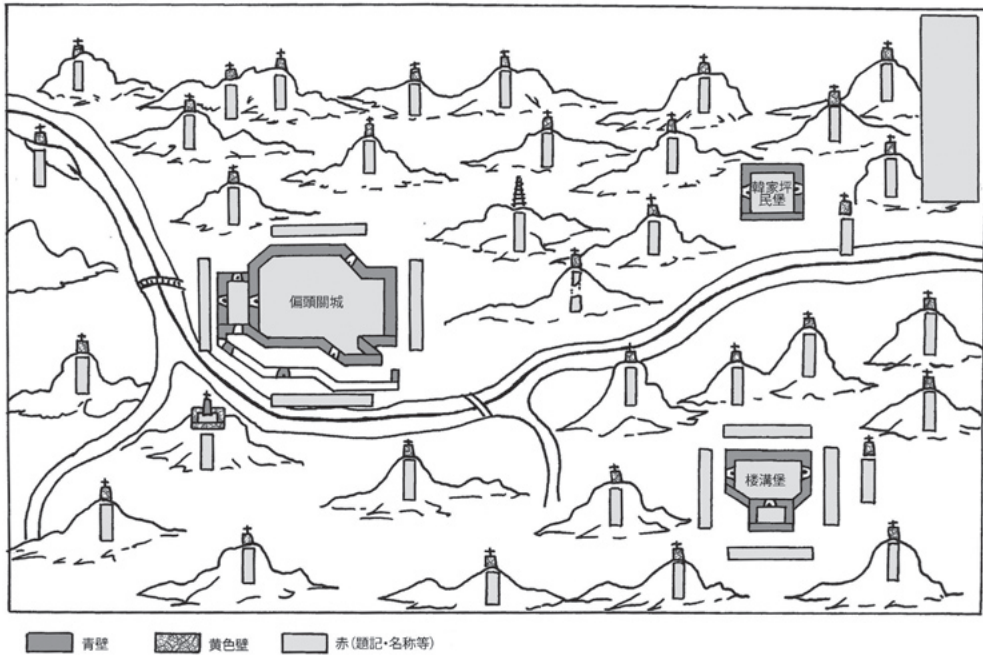
図十六 「偏關」の描図スケッチ『山西辺垣図』第六冊（順治15年(1658)（進呈者 白尚登））



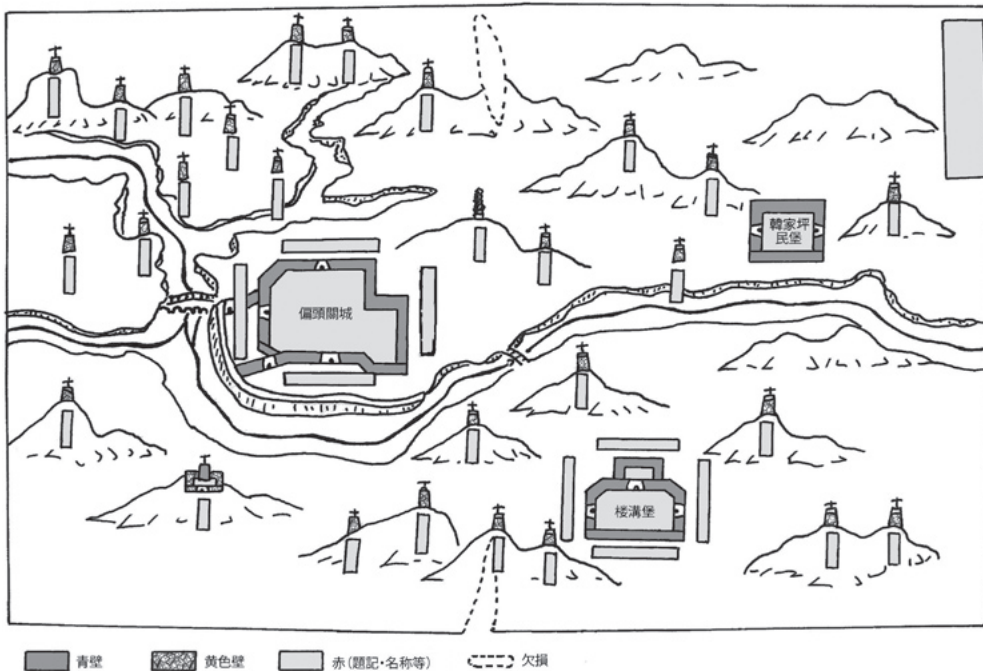
図十七 「老營」の描図スケッチ『山西三関辺垣図』（進呈年代 不詳、（進呈者 不詳））



図十九 「老營」の描図スケッチ『山西辺垣布陣圖』（京都大学蔵）（進呈年代 不詳、（進呈者 不詳））



図十八 「偏關」の描図スケッチ『山西三関辺垣図』(進呈年代 不詳、(進呈者 不詳))



図二十 「偏關」の描図スケッチ『山西辺垣布陣図』(京都大学蔵)(進呈年代 不詳、(進呈者 不詳))

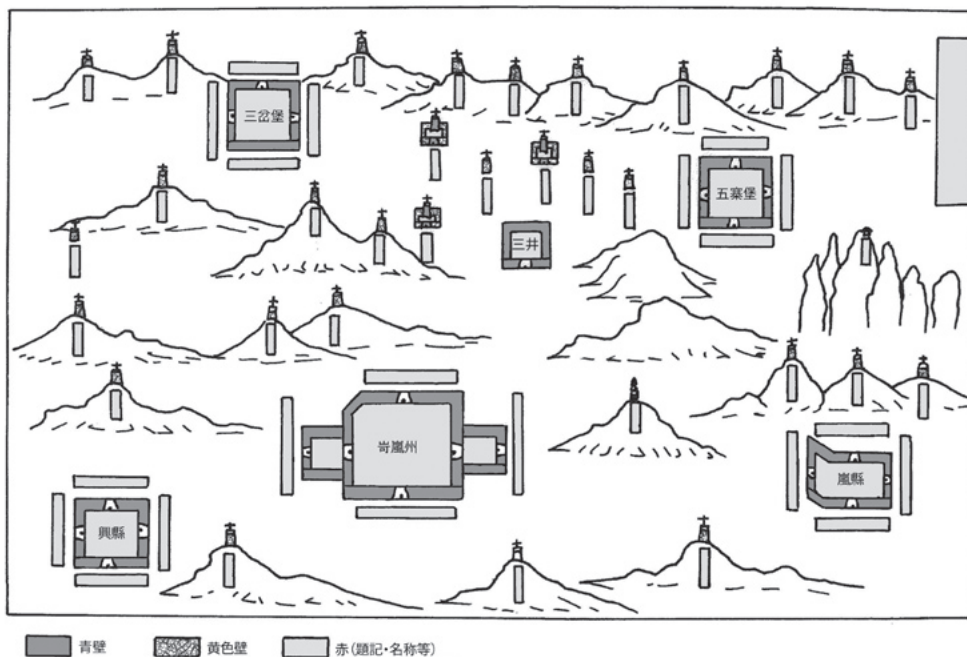
西三関辺垣図』の「老營」と「偏關」(図十七、図十八)(一八頁上段、一九頁上段)および、京都大学蔵『山西辺垣布陣図』の「老營」と「偏關」(図十九、図二十)(二八頁下段、一九頁下段)である。

国立故宫博物院蔵『山西三関辺垣図』の「老營」「偏關」(図十七、図十八)と京都大学蔵『山西辺垣布陣図』の「老營」「偏關」(図十九、図二十)を比較すると、楼溝堡の上下の向き、河川流路、墩の密度など、さまざまな点での相違が目立つ。東路の「北樓」「茹越・廣武」の場合と比べると、描図の様相の違いが顕著である。

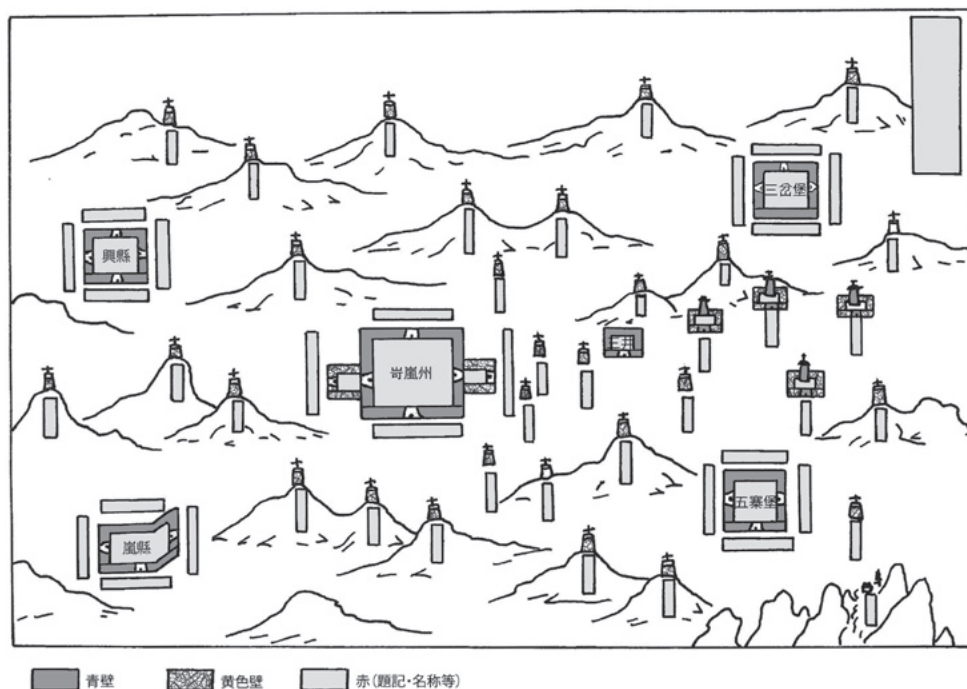
(3) 岢嵐州と嵐縣はどのような位置関係にあるか

先の(2)節と同様、西路を含む地図について、「岢嵐」の描かれる方向を検討したところ、岢嵐州を南西方向から描くものと南東方向から描くものの二類型が特定できた。これら二類型を示す図幅の描図スケッチを以下に掲げる。

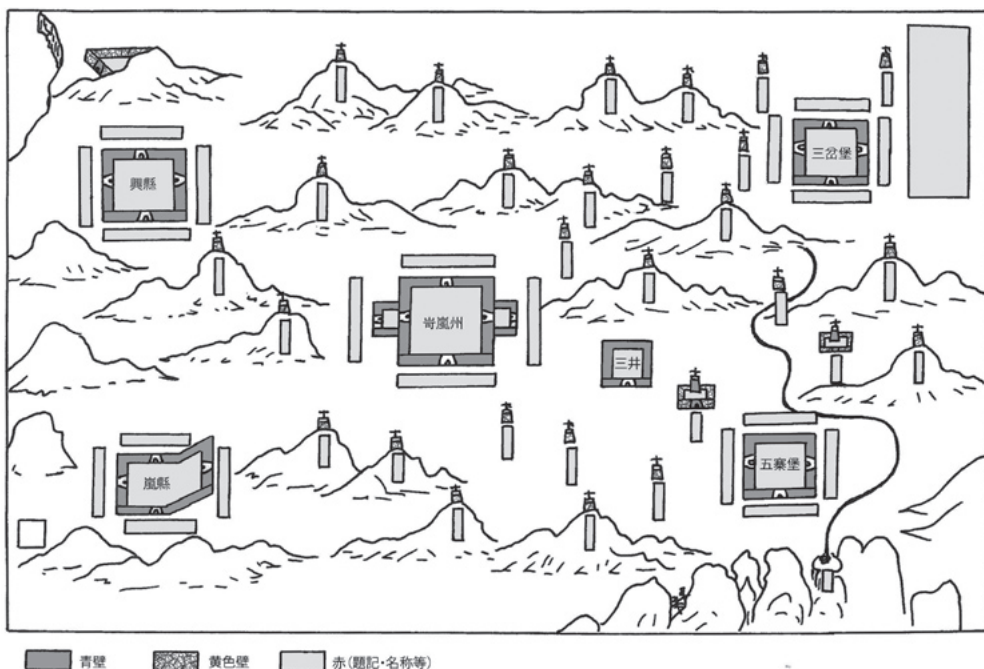
二二頁上段に『山西辺垣図』第十六冊(図二十一)、同頁下段に『山西辺垣図』第六冊(図二十二)、二二頁上段に『山西三関辺垣図』(図二十三)、同頁下段に京都大学蔵『山西辺垣布陣図』(図二十三)、それぞれの「岢嵐」図幅の描図スケッチを示す。これらのうち、『山西辺垣図』第十六冊の「岢嵐」のみが岢嵐州を南西方向から描いたもので、他は南東方向から描いている。この向きの違いに対応して、岢嵐州をとりまく興縣などの陣の配置も九十度回転している。したがって、岢嵐州が南西方向から描かれる場合は嵐縣が岢嵐州の右側に、逆に、岢嵐州が南東方向から描かれる場合は嵐縣が岢嵐州の左側に位置する。



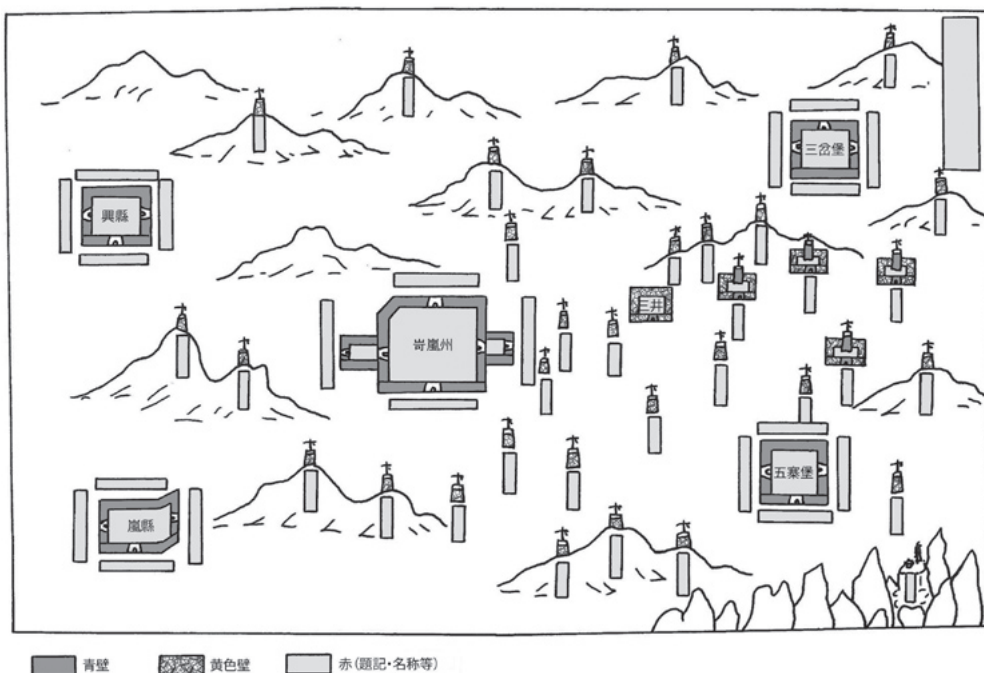
図二十一 「嵯嵐」の描図スケッチ『山西辺垣図』第十六冊（進呈年代 不詳、（進呈者 不詳））



図二十二 「嵯嵐」の描図スケッチ『山西辺垣図』第六冊（順治15年(1658)（進呈者 白尚登））



図二十三 「崞嵐」の描図スケッチ『山西三関辺垣図』（進呈年代 不詳、(進呈者 不詳)）



図二十四 「崞嵐」の描図スケッチ『山西辺垣布陣図』（京都大学蔵）（進呈年代 不詳、
（進呈者 不詳））

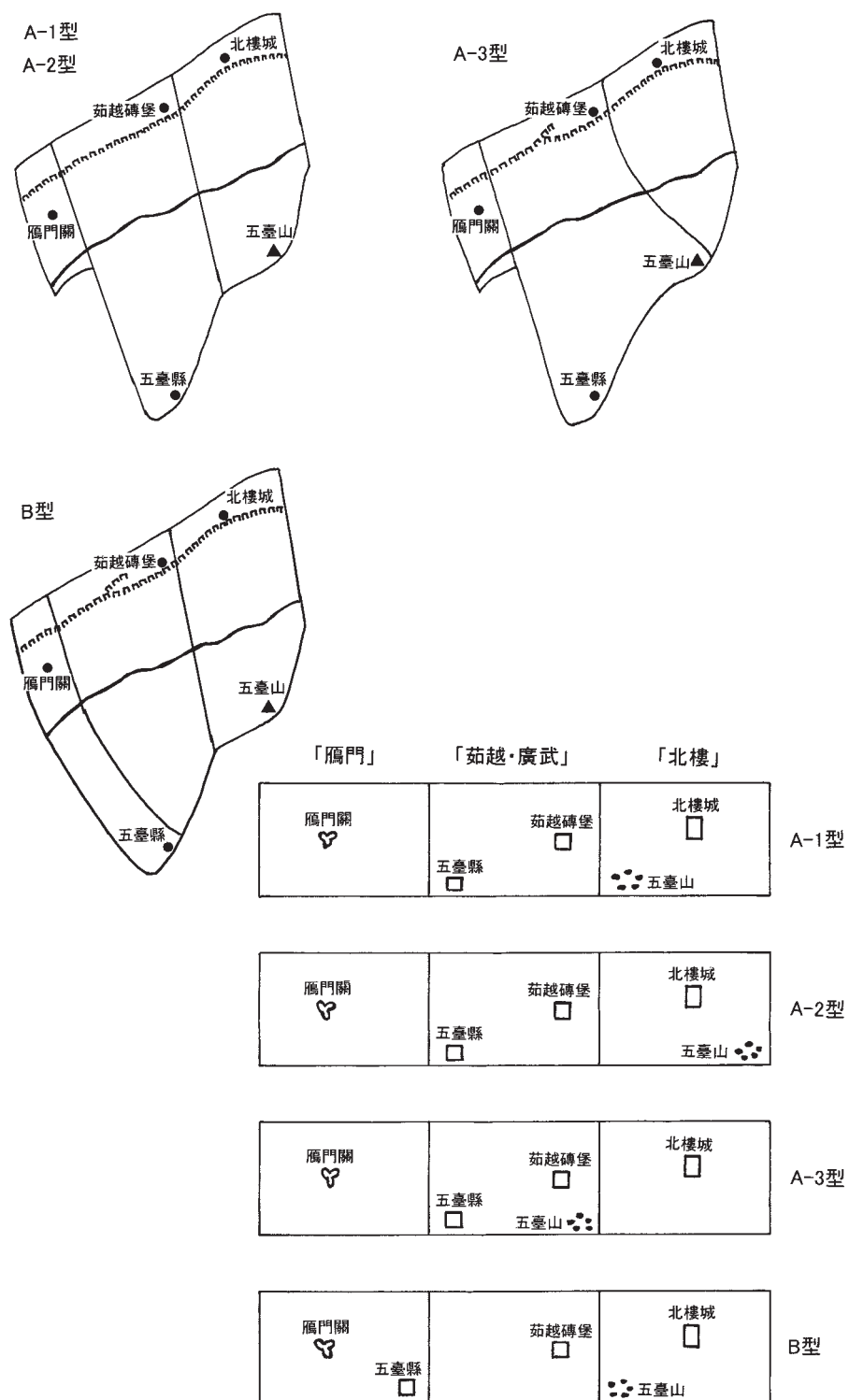
第三章 描図パターンによる「山西辺垣図群」の分類

第二章での(1)から(3)における描図の検討結果を整理し、考察を加える。

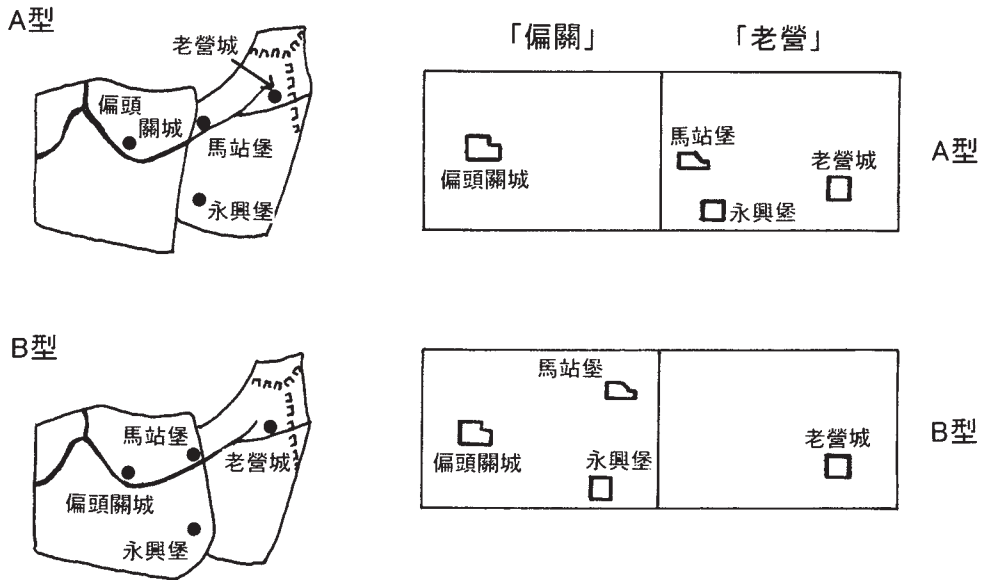
まず、五臺山と五臺縣の配置パターンについては、五臺縣が「茹越・廣武」に描かれるか、「鴈門」に描かれるかにより、大別できる(図二十五)。「茹越・廣武」に五臺縣が描かれるものをA型、「鴈門」に描かれるものをB型とする。B型では、五臺山は「北樓」の左下に描かれる。一方、A型は、五臺山の位置により三種のバリエーションがある。すなわち、五臺山が「北樓」の左下に描かれるA-1型、「北樓」の右下に描かれるA-2型、「茹越・廣武」の右下に描かれるA-3型である。A-3型の場合、「茹越・廣武」の中に五臺山と五臺縣が描かれる。京都大学蔵『山西辺垣布陣図』と国立故宫博物院蔵『山西三関辺垣図』はともに、A-1型に分類される。この描かれ方を地図上での領域区分に照らし合わせてみると、「北樓」と「茹越・廣武」の境界の線引きと「茹越・廣武」と「鴈門」の境界の線引きが焦点になることがわかる。図二十五中に示したのは、線引きの違いをわかりやすく示したものであり、厳密な境界ではない。

次に、馬站堡と永興堡の配置については、両者が「老營」に描かれるA型と「偏關」に描かれるB型に分類できる(図二十六)。京都大学蔵『山西辺垣布陣図』と国立故宫博物院蔵『山西三関辺垣図』はともにA型である。ここでも、「老營」と「偏關」との領域区分のあり方が問題になる。図二十五と同様、図二十六に示したのは、線引きの違いをわかりやすく示したものであり、厳密な境界ではない。

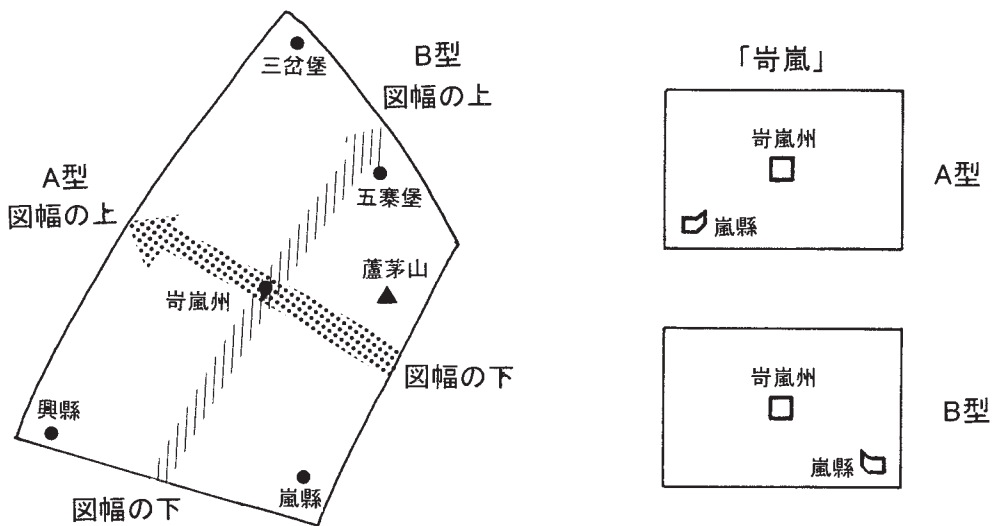
最後に、岢嵐州と嵐縣との相対的な位置関係については、岢嵐州を南東方向から描くA型と南西方向から描くB型によ



図二十五 「北樓」・「茹越・廣武」・「鴈門」の描図パターンの類型と図幅の領域区分



図二十六 「老營」・「偏關」の描図パターンの類型と図幅の領域区分



図二十七 「岢嵐」の描図方向の類型

表二 描図タイプによる「山西辺垣図群」の分類

西路		東路	地図の名称*
岢嵐州と嵐の相対的な位置関係 ⁽³⁾	馬站堡と永興堡の描かれる位置 ⁽²⁾	五臺山と五臺縣の描かれる位置 ⁽¹⁾	
B型	B型	東路を欠く	『山西邊垣圖』第十六冊 (進呈年代 不詳、(進呈者 不詳))
B型	B型	東路を欠く	『山西邊垣圖』第十七冊 (進呈年代 不詳、(進呈者 不詳))
B型	B型	B型	『山西邊垣圖』第十三冊～第十五冊 (順治2年(1645)、(進呈者 黄徽胤))
B型	B型	B型	『山西邊垣圖』第十冊～第十二冊 (順治2年(1645)、(進呈者 黄徽胤))
B型	B型	B型	『山西邊垣圖』第七冊～第九冊 (順治4年(1647)、(進呈者 呂維禔))
A型	A型	東路を欠く	『山西邊垣圖』第二冊～第三冊 (順治6年(1649)、(進呈者 劉漪))
西路を欠く	西路を欠く	(配列八～十)* A-2型 ----- (配列十四～十六)* A-3型	『山西邊垣圖』第一冊 (順治6年(1649)、(進呈者 蔡應桂)) (※東路を二組合む)
A型	A型	A-2型	『山西邊垣圖』第四冊～第六冊 (順治15年(1658)、(進呈者 白尚登))
A型	A型	A-1型	『山西三關邊垣圖』 (進呈年代 不詳、(進呈者 不詳))
A型	A型	A-1型	『山西辺垣布陣図』(京都大学蔵) (進呈年代 不詳、(進呈者 不詳))

注(1)五臺山と五臺縣の位置については、A-1、A-2、A-3の3つの型では、五臺山と五臺縣は「北樓」「茹越・廣武」に描かれ、「鴈門」には描かれない。A-1型では「北樓」の左下に五臺山、「茹越・廣武」の左下に五臺縣、A-2型では、「北樓」の右下に五臺山、「茹越・廣武」の左下に五臺縣、A-3型では、「茹越・廣武」の右下に五臺山、左下に五臺縣が描かれる。B型では、「北樓」の左下に五臺山、「鴈門」の右下に五臺縣が描かれる。図二十五参照。

(2)馬站堡と永興堡の位置については、両者が「老營」に描かれるA型と、両者が「偏關」に描かれるB型がある。図二十六参照。

(3)岢嵐州と嵐縣の相対的な位置関係については、A型では、岢嵐州を中心にした周囲の陣の配置を、南東から北西向きに見て描き、嵐縣は図幅の左下にある。B型では、岢嵐州を中心にした周囲の陣の配置を、南西から北東向きに見て描き、嵐縣は図幅の右下にある。図二十七参照。

*表一を参照。

る違いが、嵐縣が図幅の左下にあるか右下にあるかの違いに対応している（図二十七）。京都大学蔵『山西辺垣布陣図』と国立故宮博物院蔵『山西三関辺垣図』はともにA型である。

以上の分類を「山西辺垣図群」全体にあてはめてみたところ、表二のような結果が得られた。本稿で比較した三つの描図パターンすべてについて、A型およびそのバリエーションに分類されるものとB型に分類されるものとに分かれる。表二から、作成年代の相対的に古いものがB型、より新しいものがA型である可能性も推測できるが、作成年代不詳のものが多く、判断は差し控えたい。興味深いのは、『山西辺垣図』第一冊が含む二組の東路図の類型が異なることである。いずれかが別冊に含まれるものであったことをうかがわせる。

本稿では、東路と西路の一部を分析の対象とした。中路も含めて「山西辺垣図」を構成する二十図幅すべてについて、同様の分析を行うことにより、より精密な分類が可能となろう。『山西辺垣図』第一冊が含む二組の東路図が、本来、どの冊に属するものであったか推測することが可能になるかもしれない。

本稿での分析結果から判断する限り、京都大学蔵『山西辺垣布陣図』に最もよく似ているのは国立故宮博物院蔵『山西三関辺垣図』（二十冊）であることがわかった。この発見も、今後、京都大学蔵『山西辺垣布陣図』の来歴を明らかにするための重要な手がかりである。

おわりに

本稿では、個々の陣がどの図幅に描かれるか、また、図幅内での陣同士の相互の配置関係などの描図パターンに基づいて、

「山西辺垣図群」、すなわち京都大学蔵『山西辺垣布陣図』と国立故宫博物院蔵『山西辺垣図』および『山西三関辺垣図』に含まれる地図群の分類を試みた。本稿では、東路の「北樓」「茹越・廣武」「鴈門」の三図幅における五臺山と五臺縣の位置、西路の「老營」「偏關」の二図幅における馬站堡と永興堡の位置、また、西路の「崞嵐」図幅における崞嵐州と嵐縣の相対的な位置関係と図幅の向きという三点について、図幅間の相違や類似を比較検討し、分類の手がかりとした。

その結果、検討した三点のいずれに關しても、異なる二つの類型の描図パターンが明らかになった。まず、五臺縣の位置について、「茹越・廣武」に描かれるA型と「鴈門」に描かれるB型がある。A型には、「北樓」あるいは「茹越・廣武」の五臺山の位置によって、A-1型からA-3型の三種がある。これらに対し、B型では、「北樓」の左下に五臺山、「鴈門」の右下に五臺縣が描かれる。馬站堡と永興堡の位置については、両者が「老營」に描かれるA型と、「偏關」に描かれるB型がある。また、崞嵐州と嵐縣の相対的な位置関係については、崞嵐州を中心にした周囲の陣の配置を、南東から北西向きに見て描くA型に対し、B型では南西から北東向きに見て描く。

東路を描く、すなわち「北樓」「茹越・廣武」「鴈門」図幅を含む山西辺垣図のうち、五組がA型（二組がA-1型、二組がA-2型、一組がA-3型）に、三組がB型に分類された。西路を描く山西辺垣図のうち、四組はA型、五組はB型に分類された。東路も西路も含む山西辺垣図は、京都大学所蔵のものを含めて、六組ある。それらのうち、三組は、描図パターンを検討したいずれの検討箇所についてもA型であり、他の三組はB型であった。

京都大学蔵『山西辺垣布陣図』は、五臺山と五臺縣の位置についてはA-1型、馬站堡と永興堡の位置および崞嵐州と嵐縣の相対的な位置関係と図幅の向きについては、ともにA型であった。これと同じ分類となるのが、国立故宫博物院蔵『山西三関辺垣図』（二十冊）である。『山西辺垣布陣図』と『山西三関辺垣図』に含まれる個々の図幅を詳細に検討すると、陣の形状や山河の様相、墩の数、絵筆の遣い方、文字の書き方など、さまざまな相違が見られる。けれども、各図幅に描かれ

る対象や描かれる領域の範囲といった基本的な要素においては、明確な共通点がある。

本稿での描図パターンの分類により、京都大学蔵『山西辺垣布陣図』が多数の「山西辺垣図群」のなかでどのような位置を占めるのかを解明する手がかりの一端が得られたと評価できる。また、文字判読や現物閲覧の困難な条件下でも可能な分析方法があることが確認できたことも一つの成果といえる。

今後は、「山西辺垣図群」に含まれるすべての図幅の描図パターンについて本稿と同様の比較と分類を試みるもののほか、作成年代や進呈者、当時の軍事的政治的情勢などのかかわりを考慮しつつ、分類結果にどのような傾向があるのかを明らかにする必要がある。また、そうした分析成果をもとに、管轄領域の区分やその変化を探り、山西の内長城域における軍事防衛圏の空間構成を解明するという課題もある。こうした調査分析は、木津・宇佐美による文字情報の判読作業と関連文献による考証、「山西辺垣図群」で用いられているさまざまな描法についての絵画論的観点からの分析結果などとも照合しつつ、相互に検討を重ねながら進めることとしたい。また、国立故宫博物院図書文献処との相互交流や共同調査の企画と実行も今後の課題としたい。

注

- (1) 田中和子・木津祐子(二〇一一)「国立故宫博物院蔵『山西辺垣図』および『山西三関辺垣図』と京都大学蔵『山西辺垣布陣図』との比較」、京都大學文學部研究紀要、第五十号、一〇二九頁。
- (2) 田中和子・木津祐子・宇佐美文理(二〇一〇)「『山西鎮辺垣布陣図』(仮称)に関する地理学、文献学、絵画論的調査―予備的考察―」、京都大學文學部研究紀要、第四十九号、一〇五三頁。

〔付記〕本研究には、(財)鹿島学術振興財団・平成二十二年度研究助成「『山西長城辺垣布陣図』(仮称)の研究と修復保存」(代表・宇佐美文理)の助成金を使用した。国立故宫博物院での調査に際しては、図書文献処の盧雪燕先生のご協力を得た。記して感謝申し上げます。

mountains and rivers, and so on. The differences or similarity might be useful to classify the subsets, then, to arrange them in their chronological order.

Based on the analysis, we recognized the following remarks:

About (a), there are four types to assign the locations of Mt. Wutai and Wutai in the map sheets of 'Beilou,' 'Yuyue and Guangwu,' and 'Yanmen.'

Type A: Mt. Wutai and Wutai are drawn in the map sheets of 'Beilou' and/or 'Yuyue and Guangwu,' but not in 'Yanmen.'

Type A-1: Mt. Wutai is drawn at the lower left in the map sheet of 'Beilou' and Wutai at the lower left in the map sheet of 'Yuyue and Guangwu.'

Type A-2: Mt. Wutai is drawn at the lower right in the map sheet of 'Beilou' and Wutai at the lower left in the map sheet of 'Yuyue and Guangwu.'

Type A-3: Mt. Wutai and Wutai in the map sheet of 'Yuyue and Guangwu.'

Type B: Mt. Wutai is drawn in the map sheet of 'Beilou' and Wutai in the map sheet of 'Yanmen.'

Among the eight East subsets, two subsets are Type A-1, two are Type A-2, one is Type A-3, and three are Type B.

About (b), there are two types, with respect to the locations of Mazhan and Yongxing drawn in the map sheets of 'Laoying' and 'Pianguan.'

Type A: Mazhan and Yongxing are drawn in the map sheet of 'Laoying.'

Type B: Mazhan and Yongxing are drawn in the map sheet of 'Piangua.'

Of the nine West subsets, four subsets are Type A and five subsets are Type B.

About (c), there are two types, with respect to the relative positions between Kalan and Lan in the map sheet of 'Kalan.'

Type A: the upper side of map sheet 'Kalan' is directed to northwest. Lan faces Kalan to the right hand.

Type B: the upper side of map sheet 'Kalan' is directed to northeast. Lan faces Kalan to the left hand.

Of the nine West subsets, four subsets are Type A and five subsets are Type B. This result is similar to those in the examination of (b).

The Analysis described in this article made it clear that: (1) the map series of the Kyoto University, 'Map of Shanxi Sanguan region depicted along the Great Wall' and one volume of 'Map of the region depicted along the Great Wall in Shanxi,' which have the East and West subsets of map sheets, are classified to Type A in the entire examinations of (a), (b), and (c). On the other hand, the other three volumes of 'Map of the region depicted along the Great Wall in Shanxi' are classified to Type B after the examinations. (2) The map series of the Kyoto University resembles very well to the 'Map of Shanxi Sanguan region depicted along the Great Wall' stored in the National Palace Museum. They show Type A-1 in the examination of (a), and Type A in the examinations of (b) and (c). There is possibility that these two map series stored in Japan and Taiwan were made in the same period or situation.

Classification of Map Series Depicted along the Great Wall in Shanxi 山西 Stored in National Palace Museum of Taiwan and in Kyoto University on the Basis of Their Mapping Patterns

Kazuko TANAKA, Yuko KIZU and Bunri USAMI

The National Palace Museum of Taiwan owns two different series of maps depicted along the Great Wall in Shanxi. They are 'Map of the region depicted along the Great Wall in Shanxi 山西辺垣図' and 'Map of the Shanxi Sanguan region depicted along the Great Wall 山西三関辺垣図.' The Kyoto University of Japan also owns a similar map series of 'Defense Map showing the region along the Great Wall in Shanxi 山西辺垣布陣図.' These three map series are map sets composed of map sheets, and are regarded to belong to a big group of 'volume sets of map sheets depicted along the Great Wall in Shanxi.' A complete volume set of 'map sheets depicted along the Great Wall in Shanxi' is divisible into three subsets composed of twenty map sheets: the East subset (six map sheets), the Central subset (six map sheets), and the West subset (eight map sheets). These three subsets cover the geographical region along the east line of Great Wall, the region along the central line, and the region along the west line, respectively.

On some cover sheets of the three map series stored in the Museum and the University, the age of map-making and names of related executive officers are written, but not on the others. No clear data with respect to their administrative and military purposes and ways of mapping are obtained, however.

We compared the mapping characteristics between map sheets of the three map series, and classified them on the basis of the similarity between their mapping patterns. Based on the comparison and classification, it seems to be possible to indicate which map series of the Palace Museum are most similar to the map series of the Kyoto University, and to clarify their chronological order and ways of mapping.

'Map of the region depicted along the Great Wall in Shanxi' of the National Palace Museum consists of eight volumes of nineteen subsets of 128 map sheets. Four volumes of the eight are composed of the East, Central and West subsets of twenty map sheets, and the rest are composed of one or two subsets. 'Map of the Shanxi Sanguan region depicted along the Great Wall' has all subsets of twenty map sheets. Five map sheets in the Central subset and two map sheets in the West subset are missing in the map series of the Kyoto University, unfortunately.

We selected (i) three map sheets of 'Beilou 北樓,' 'Yuyue and Guangwu 茹越・廣武,' and 'Yanmen 鴈門' of the East subset, (ii) two map sheets 'Laoying 老營' and 'Pianguan 偏關,' and (iii) a map sheet of 'Kalan 崑崙' of the West subset. Key locations and geographic relation which we observed in the analysis are (a) Mt. Wutai 五臺山 and Wutai 五臺縣 in the map sheets of 'Beilou,' 'Yuyue and Guangwu,' and 'Yanmen,' (b) Mazhan 馬站堡 and Yongxing 永興堡 in the map sheets of 'Laoying' and 'Pianguan,' and (c) geographical relation between Kalan 崑崙州 and Lan 嵐縣 in the map sheet of 'Kalan.'

Some clear differences were identified in mapping characteristics between the map sheets depicting the same district, for example, ways of drawing and painting, sites of camps, beacons,

國立故宮博物院、京都大學所藏〈山西邊垣圖群〉 在描繪模式上的比較和分類

田 中 和 子 ・ 木 津 祐 子 ・ 宇佐美 文 理

2011年11月，我們在國立故宮博物院調查了《山西邊垣圖》和《山西三關邊垣圖》，發現其中幾幅圖的描繪模式與京都大學所藏《山西邊垣佈陣圖》（京大圖）有明顯的差別。最為顯著的差別在如下三項上：1）東路的五臺山、五臺縣所處的圖幅與其在圖幅中的位置，2）西路的馬站堡、永興堡所處的圖幅與其在圖幅中的位置、3）岢嵐州和嵐縣在一幅圖中的相對佈置。通過此三項的分析，我們了解到〈山西邊垣圖群〉一系列地圖按照描繪模式的不同可以分成A、B兩個大類型。〈山西邊垣圖群〉中與京大圖一樣具有東西兩路（即缺中路）的一共有六套，三套為A型（包括京大圖在內），其餘三套皆為B型。A型圖中最接近於京大圖的就是《山西三關邊垣圖》（全二十冊）。